

インテリジェントな データガバナンスのための ベストプラクティス

インテリジェントな自動化で企業データのガバナンスプログラムを
確立するための実践ガイド

インフォマティカについて

デジタルトランスフォーメーションによって我々の期待値が変化しています。より良いサービスを、素早く、便利に、低コストで利用したいという期待が高まっているのです。企業も状況に応じて変化する必要があります。そしてそのヒントは「データ」にあります。

エンタープライズ向けクラウドデータ管理で世界をリードするインフォマティカは、俊敏性を高め、新たな成長機会を実現するだけでなく、新たなイノベーションを生み出すことさえ可能にする将来への洞察力を提供します。インフォマティカは、あらゆるデータを徹底的に重視し、企業の成功に必要とされる汎用性を提供します。

インフォマティカは、企業がこれからのインテリジェントな破壊的イノベーションを推進できるよう、当社が提供するあらゆるサービスを通じてデータの力を継続的に引き出すことを支援します。

目次

はじめに.....	4
急速に進化しているデータガバナンスの役割.....	4
インテリジェントなデータガバナンスとは？.....	7
インテリジェンス革命後も変わらないこと.....	10
どのような変更が必要か？インテリジェントなデータガバナンスを 運用化する方法は？.....	13
インテリジェントなデータガバナンスの業務上のメリットは？.....	16
まとめ.....	17

「21世紀におけるデータは、18世紀における石油のような存在、すなわち活用の余地が大きく残された貴重な資産である。石油と同様に、データの基本的な価値を認識し、その抽出方法と活用方法を習得した者には、大きな見返りがある」

- Yonogo, Joris Tonders氏

はじめに

今このガイドを手に行っているということは、次の2つの点を知っているはずで

- ・ ビジネスを成功に導くには、データ環境、業務環境、技術環境の理解が不可欠である。
- ・ このような理解を形づくり、最新の状態に保つには、手作業だけでは到底追いつかない。

また、各分野の業務メタデータと技術メタデータを連携させることが極めて重要であり、確立した理解に基づいてどのようなアクションを実行できるかによってデータガバナンスの真価が決まることも知っているはずで

競合他社も、同じことを考えています。

データガバナンスは、ここ数年で飛躍的に進化しました。単にセマンティクス（意味論）に合わせた

それでは、詳しく見ていきましょう。

急速に進化しているデータガバナンスの役割

データガバナンスの役割が急速に進化し始めています。具体的にどういうことでしょうか？誕生以来、データガバナンスは常に進化を続けてきましたが、データガバナンスに対する要求の増大に伴い、その進化が加速しています。データがどこにでも大量にあるのに加え、俊敏性と製品開発期間への期待がかつてないほど高まっているため、データガバナンス能力を備えていない企業は競争力を失うこととなります。



図1：誕生からインテリジェンス革命まで

誕生

従来型アプローチのデータガバナンスは、人々がデータを誤用して組織をリスクにさらすことを防止するための対策（一連の制御と制限）として誕生しました。多くの場合、業務上の価値を創出することよりも特定のルールに従ってリスクを緩和することに焦点を合わせた、規制中心の対策でした。

このアプローチの問題点は、業務上の成果と結び付いていないことです。そのため、データガバナンスの成否は、規制の対象範囲とデータガバナンス運用チームの作業量によって評価するしかありませんでした。データガバナンスに関する取り組みは、対象部門内のみで行われ、全社に適用されることがなく、その結果、日々の業務遂行にはほとんど影響がありませんでした。

拡大

規制の対象範囲が拡大していくのと同時に、信頼できるデータの価値が認識されるようになったことから、データガバナンスとその活用法に対する認識も広がりました。規制の拡大に伴い、技術的な要素だけでなく、その目的とプロセスも新たな焦点となりました。同時に、データを正しく理解できれば保有データが自社の資産になることに、世界中の企業が気付き始めました。

データガバナンスには多大な労力が必要ですが、法規制へのコンプライアンスを確保するだけでは、その労力を正当化することができなくなりました。このような背景から、データの価値を高めるための計画が検討され始めました。つまり、「どうせコンプライアンスにコストをかけるのであれば、デジタルトランスフォーメーション（DX）を推進しよう」と考えたのです。それには、データガバナンスを次のように進化させる必要がありました。

- **全社の理解**：組織の一部だけでなく、全社規模で取り組む
- **ビューの連携**：データだけでなく、データのコンテキストと価値も示す
- **成果の促進**：ガバナンス自体を目標とするのではなく、業務上の成果を促進する

価値主導のガバナンス、世界の変化

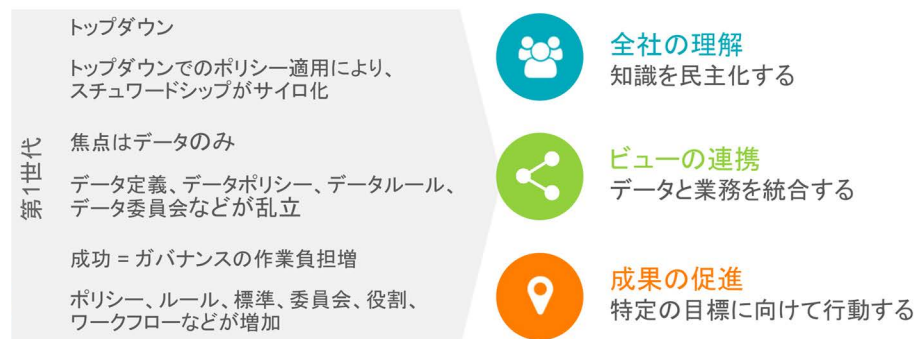


図2：価値主導のガバナンス、世界の変化

「今日、50億以上の消費者が日常的にデータをやり取りしています。この数は2025年までに60億人（世界人口の75%）に達します。2025年には、インターネットに接続したすべての人が18秒に1回以上のペースでデータをやり取りすることになります。これを可能にするのが、世界中で接続された数十億ものIoTデバイスです。これらのIoTデバイスにより、2025年には90 ZB超のデータが生成される見込みです」

- 『The Digitization of the World from Edge to Core』
David Reinsel氏、John Gantz氏、John Rydning氏¹

インテリジェンス革命

「拡大」のフェーズにおいて、明らかに手作業のデータ管理手法は通用しなくなってきました。自動化を通じてデータガバナンスを拡張し、人手による入力を最大化して成果を促進することが、極めて重要でした。18世紀と19世紀に機械が製造業に変革をもたらしたように、21世紀には人工知能 (AI) と機械学習がデータ管理に対する考え方に变革をもたらしています。データのインテリジェンス革命の時代と呼ばれます。

- **いつ?今すぐ!** インターネットの普及によってデータに注目が集まり、データは「現代の石油」と言われるようになりました。データがこのような資産として認識されるようになったことは、データのインテリジェンス革命の推進にも大きく寄与しています。データのインテリジェンス革命を今になって始める企業は、すでに後れを取っています。そして、先頭に躍り出ない限り、どんどん不利な立場に追い込まれます。信頼できるデータが最良の資産であり、世界のデータ量が2025年までに175 ZB (ゼタバイト) に増加するとしたら¹、今すぐ行動してついて行かなくてはなりません。
- **誰が?全員!** 企業がデータ主導型になる必要性は世界的に認識されています。しかし、そのメリットをすでに享受できているのは、先頭を走る企業だけです。世界の時価総額上位企業10社のうち7社では、データが主な成功要因となっています。その最たる例がApple社です。同社は2020年8月に米国企業として初めて時価総額が2兆ドルを突破しました²。今や、あらゆる企業がデータ主導型への移行に取り組みなければならないのです。
- **どのように?可及的速やかに!** 意思と献身だけでは先進企業には追いつけません。AIと機械学習も必要です。規模の拡大により、手作業だけでは不十分になりました。データ量の増加に対応するには、自動化を採用しなければなりません。しかし、すべてを機械化できるわけではありません。重要なのは、従業員が現在遂行している業務のうち、どの業務を機械で補うことが可能なのかを見極め、その範囲を拡大し続けることです。

インテリジェンス革命

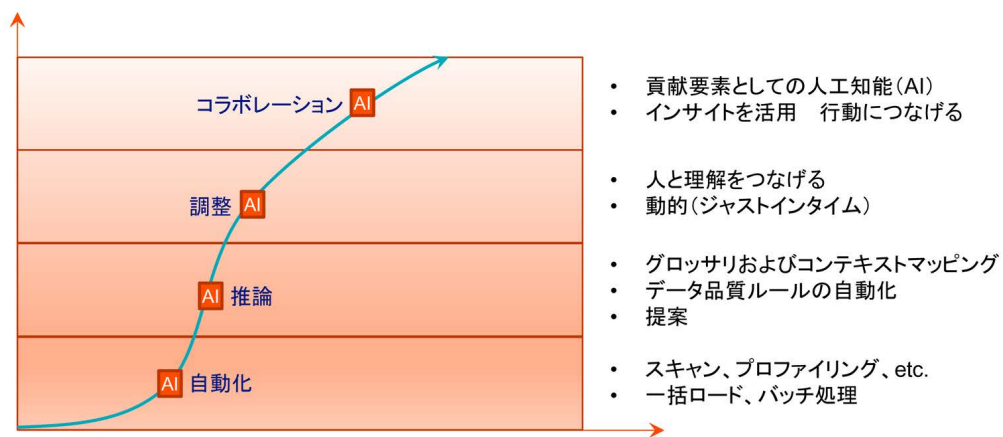


図3: インテリジェンス革命

¹ Seagate社の委託に基づくIDC社ホワイトペーパー『Data Age 2025: The Digitization of the World From Edge to Core』、2018年11月

² <https://www.nbcnews.com/business/business-news/apple-now-worth-2-trillion-making-it-most-valuable-company-n1237287>

インテリジェンス革命は、データ管理に後押しされ、デジタルの世界の常として、かつてないスピードで進んでいます。

- **自動化**: 今日のデータガバナンスでは自動化が必須です。これまで手作業だったシンプルなデータガバナンス業務にテクノロジーを導入します。スキャン、プロファイリング、インデックス処理などの作業を、少数から開始し、最終的にはほぼ無制限の件数に拡大していきます。
- **推論**: 自動化により、データガバナンスツール内に大量の情報が生成されます。自動化は生データの規模に対応するのに役立ち、推論はその生データから意味や価値を引き出すのに役立ちます。生データを関連付けて一貫した総体的なビューを確立できることが重要です。
- **調整**: 機械学習とAIの活用が増え、企業は従業員に対する理解（従業員がどのように貢献し、業務遂行のために何を必要としているのか）を深めています。コミュニティとデータ/情報を動的に接続してパフォーマンス、効率、創造性を強化しようとする動きが積極化しています。
- **コラボレーション**: AIと機械学習の発展に伴い、対応するソフトウェア機能の開発、拡張、調整のためのコラボレーションも必要になります。

インテリジェントなデータガバナンスとは？

データのインテリジェンス革命に向けた唯一有効なソリューションが、インテリジェントなデータガバナンスです。インテリジェントなデータガバナンスにより、企業が管理しなければならないデータ量とデータタイプの増加に対応できます。インテリジェントであることが極めて重要です。手作業によるデータガバナンスでは、データ量とデータタイプの増加に効果的に対応できません。このセクションでは、あらゆるデータガバナンスプログラムに伴う3つの主な課題と、インテリジェントなデータガバナンスを通じてそれらの課題を解決する方法について説明します。

インテリジェントなデータガバナンス

データガバナンスの課題

手作業

手作業で行うデータガバナンスは業務の推進要因ではなく負担とみなされ、手作業はデータガバナンスイニシアチブにとって命取りになり得る。

複雑さ

タスクが複雑すぎると、イニシアチブが行き詰まったり、手に負えないほどのカスタマイズにつながったりする可能性がある。

努力が成功に結び付いていない
一般的にデータガバナンスは社内の他の取り組みと結び付いておらず、進捗がサイロ化している。

インテリジェントなソリューション

拡張可能な自動化

データガバナンスを最初から自動化すると、関係者は過度の負担を課されることなくビューのキュレーションや微調整を実行できる。

一貫性

堅牢かつ俊敏なデータガバナンスフレームワークを使用すれば、イニシアチブを迅速に開始して容易に適応させながら拡張できる。

拡張可能なモデル

データガバナンスを他のデータプログラム（データカタログ、データ品質、データプライバシーなど）と結び付ければ、進捗を連携させることができる。

図4: インテリジェントなデータガバナンス

「人々がデータイネーブルメントのビジョンを前向きに受け入れてコミットすれば、安全に高品質なデータを確保できる可能性が高くなります」

- McKinsey³

課題1: 手作業

現代の企業がデータガバナンスに取り組む際に最初に直面する最も喫緊の課題は、オペレーションの規模と、多くの従業員の抵抗です。従来、データガバナンスは手作業で行われてきました。社内の個人がそれぞれの知識やアイデアを持ち寄って実施していました。しかし、その見返りは必ずしも大きいものではありませんでした。

企業によっては、5,000万件以上のレコードを保有する場合があります。5,000万件ものレコードは、数えるだけでも何年もかかってしまいます。手作業で文書化しようとするれば、それ以上の期間がかかります。これだけのデータ量を処理するには、自動化以外に選択肢はありません。

ソリューション: 拡張可能な自動化

手作業に伴う課題を解決するには、データガバナンスに関与することで得られるメリットを各個人に示すのが効果的です。作業の一部を自動化することで労力よりも多くの見返りを得られるのであれば、従業員は自動化に対して前向きになります。この課題を解決する鍵は、従業員の時間を、単純作業ではなく、決して自動化できない業務に充てることです。

例えば従業員に特定のシステムの専門家がいた場合、従来型のアプローチによるデータガバナンスでは、そのシステムの各項目に関して把握しているすべての情報を文書化して総体的なデータ辞書を作成しようとするでしょう。一方、インテリジェントなデータガバナンスでは、時間のかかる作業をまず機械に実行させます。これは多くの企業に当てはまるやり方です。例えば、ほとんどの企業は何らかの個人データ（氏名、住所、電話番号、クレジットカード情報など）を保有しています。最初にこれらの個人データの識別を機械に実行させるのがお勧めです。共通のパターン、繰り返し登場するデータタイプ、名前マッチングなどにより、専門家に関与させる前に、多くの情報を把握することが可能です。専門家は作業をゼロから始めることなくキュレーションや微調整に専念できるため、はるかに効果的です。このアプローチでは、数百時間もの人時間を節約できるだけでなく、データガバナンスに対する専門家の関与とサポートを継続的に獲得しやすくなります。

課題2: 複雑さ

データガバナンスにおける第2の大きな課題は、複雑さです。データタイプはかつてないほど増加しており、それらのデータを複数の分野でさまざまな業務成果のために使用しています。従来型アプローチのデータガバナンスでは、完全にオープンなモデルを通じて、資産のタイプと資産の関係性を文書化しています。これは、理論上は魅力的な方法に見えるかもしれませんが。カスタマイズ性が高く、さまざまな新しいデータタイプを文書化できるためです。しかし実際には、問題を解決するどころか、より多くの問題を生むこととなります。そして、データガバナンスが手に負えないほど複雑化します。

³ <https://www.mckinsey.com/business-functions/mckinsey-digital/our-insights/designing-data-governance-that-delivers-value>

ソリューション：一貫性

果てしなく拡大し続けるフレームワークに新しいカテゴリーを次々と追加したり、すでに存在するものを何度も一から作り直したりすることなく、明確な全体像に基づき、タイプと関係を使用して、必要なだけ具体化することが重要です。業界やユースケースを問わず、どのようなビジネスであれ、構成要素はほぼ共通しています。その構成要素とは、グロッサリ用語、システム、ポリシー、プロセスなどです。これらの構成要素を分解し、つなぎ合わせることで、組織の全体像を正確に把握できます。

自動化とインテリジェンスを重視するのであれば、**一貫性**に優先的に取り組む必要があります。

データガバナンスのフレームワークの中には、無制限のカスタマイズ性を備えているものもあります。そのカスタマイズ性を活用して各顧客に「最適」なフレームワークを構築したいと考えるかもしれませんが、顧客ごとに基盤が異なると、イノベーションや自動化は実現しません。

一貫性が高ければ高いほど、インテリジェンス、自動化、機械学習を有効に活用できます。データ管理は、放っておけば複雑化する一方です。そのため、新しいアイデアが生まれるたびに新しい資産タイプを作成することはせず、それぞれの相違点よりも共通点に目を向けます。

- ・ 「レポート」と「列の集合体」は根本的には同じものではないのか？
- ・ 「個人データカテゴリー」と「複数の用語をまとめたグロッサリドメイン」は同じではないのか？
- ・ 「データ管理者／処理者」と「処理対象の個人データを扱う法人」は同じではないのか？
- ・ 「データ資産に依存する業務成果」と「データ資産によって実現する能力」は同じではないのか？
- ・ 「API」と「システム間のインターフェイス」を同タイプのものとして考えることはできないのか？

課題3：努力が成功に結び付いていない

データガバナンスにおける第3の主な課題は、企業の成功と直接結び付いていないことです。「誕生」のセクションでも述べたとおり、データガバナンスは価値を付加することよりもアーチファクトを作成することに重きを置いていました。そのため、データガバナンスは特定のチームに与えられた権限であり、そのチームは日々の業務遂行を支援してくれるのではなくデータの定義についてしつこく聞いてくるだけだとみなされるようになりました。ガバナンスに対するニーズが変化し、その範囲がかなり拡大したことにより、多くの企業がデータガバナンスを次のようなイニシアチブとしてリブランディングしています。

- ・ データエクセレンス
- ・ データインテリジェンス
- ・ データ戦略
- ・ データエンパワーメント

しかし、ガバナンスを業務目標と結び付けるには、名称を変更するだけでは不十分です。複数の分野のビューを連携させ統合する必要があります。

ソリューション: 拡張可能なモデル

それでは、このようなデータガバナンスビューをどうすれば確立できるでしょうか? 名称を変更するのも悪くはありませんが、より有効なのはインパクトを変えることです。データガバナンス (データエクセレンス、データエンパワーメント、etc.) にとって重要なのは、内容を明らかにするだけでなく、全社の理解に基づいて実施することです。そのためには、信頼できる情報を業務リーダーに提供しなければなりません。データを信頼できれば、そのデータに基づく分析や意思決定も信頼できます。最終的な目標は、定義を定期的に更新することではなく、本当の変化をもたらす、複数の専門家が協力して、企業データ管理を実現することです。

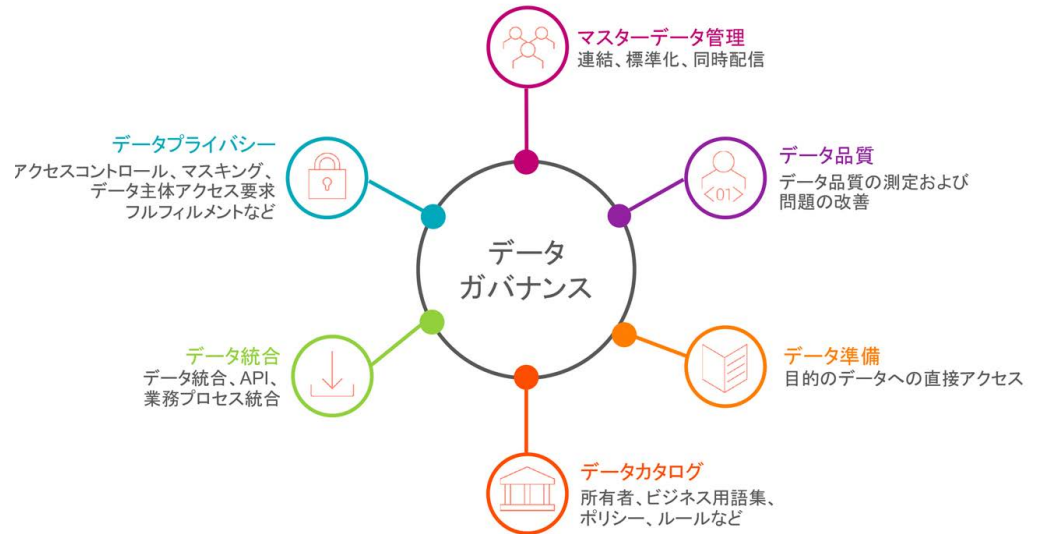


図5: インテリジェントなデータガバナンス

インテリジェンス革命後も変わらないこと

データのインテリジェンス革命により、多くの物事が変化しました。単調な作業を機械に任せられるようになったことで、業務遂行やプロセス運用化の方法も変化しました。しかし、依然として変わらないことも数多く残っています。例えば、ガバナンスプログラムの中心となる基本原則やフレームワークです。変化に目を向ける前に、変わっていない点について見てみましょう。

データガバナンスの基本原則は変わっていない

• 何よりも重要なのはエンゲージメントと採用率

データガバナンスプログラムの最終的な成否は、人々がそれを採用するかどうかで決まります。史上最高の文書化システムを構築しても、それを利用する人間がいなければ、何の役にも立ちません。また、すべてを自動化できるわけではありません。実際に作業する人間がいなければ、その「史上最高」の文書化システムを維持することはできません。ユーザーによる利用率が極めて重要であることは、インテリジェントデータ革命後も変わりありません。

- **大きく考え、小さく始める**

前述のとおり、データガバナンスは大規模な取り組みですが、一度にすべてを実行する必要はありません。特定のプロジェクトや分野に取り組んで、プログラムの価値を実証してから、さらに進めるのが理に適っています。しかし、小さく開始しつつも、常に最終目標を念頭に置く必要があります。そのとき取り組んでいるプロジェクトの関係者だけが騒ぎ回っても意味がありません。最終的に全社に拡張することが目標としたら、特定のグループだけでなく全員にとって訴求力のあるプログラムにすることが重要です。

- **実用性を重視**

データガバナンスを開始する前にすべての意思決定を行う必要はありません。「分析マヒ」の状態に陥ると、開始までに何か月もかかってしまいます。事前にすべてを完璧にしようとする、いつまでたっても開始できません。「ガバナンスのためのガバナンス」は避けましょう。すべてを管理しようとするのではなく、協力してナレッジグラフを作成し、必要なものについてのみエンリッチ化します。完璧でなくても、誰かがそれを使用して、問題があれば、報告するでしょう。誰も使用しなければ、問題になりません。データガバナンスプログラムを構築する際には、実用性を重視しましょう。

- **深さよりも広さ**

データガバナンスを一度に完成させる必要はありませんが、ある程度の全体像を定めておくことは有効です。輪郭を決めれば、各分野の専門家が必要に応じて中身を埋めていくことができます。全体像が定まっていない状態で詳細に取り掛かるよりも、エンリッチ化やコラボレーションのための土台となる全体像がある方が作業は容易になります。

- **モデル化しない**

データモデリングは、それ自体は有用な作業ですが、すべてに完全適合する厳密なデータモデルを構築しようとするのは負け戦です。データガバナンスプログラムでは、理に適っていてユーザーの99%が理解可能な方法で文書化できる柔軟性を確保しましょう。実用性を妨げるような厳密なルールは避けてください。

社内文化の変革は極めて重要

データガバナンスにおいて、最大の関心事となるのはエンゲージメントと採用率です。そのため、社内文化の変革は依然として極めて重要です。社内文化の変革は、ある意味、かつてないほど容易になっています。自動化により、各担当者が保有する知識をすべて文書化する必要はないからです。

必要なのは、テクノロジーによって検出された情報を、データベースには保存されていない情報（日々の業務を通じて獲得した知識）でエンリッチ化することだけです。そのためには、従業員の日常業務にガバナンスプラクティスを組み込み、次の3ステップを通して社内文化の変革を促進します。

1. 頭: 支持を得る

- ・ エンゲージメントの推進要因と阻害要因を特定する
- ・ すべての分野の人間にとって訴求力のあるプログラムを策定する
- ・ 変革のためのインセンティブを与える
- ・ 課題に真正面から取り組む

2. 身体: 変革を実行する

- ・ 小さな変革が大きな変革を生む
- ・ 変革が標準になるまで繰り返す
- ・ シンプルな取り組みから開始する（困難な作業は後回し）
- ・ イニシアチブをサポートしてから、イニシアチブをリードする（自己永続的なイニシアチブ）

3. 心: 変革を定着させる

- ・ 浮き沈みがあっても信念を持ち続ける
- ・ 幅広く情報を提供して、進捗を可視化する
- ・ ユーザーの日常業務に組み込み、継続的にインセンティブを与える
- ・ コミュニティを構築して、レジリエンスを高める
- ・ 再検討と再検証を行って、長期的な支持を得る

明らかにすべき事柄は依然として同じ

データについて問うべき25の質問はこれまでと同じです。

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> データの意味は？ | <input type="checkbox"/> このデータにアクセスできる社内ユーザーは誰か？ |
| <input type="checkbox"/> どのように構造化されているか？ | <input type="checkbox"/> このデータにアクセスできる社外ユーザーは誰か？ |
| <input type="checkbox"/> 保存場所は？ | <input type="checkbox"/> データの収集場所は？ |
| <input type="checkbox"/> 保有している理由は？ | <input type="checkbox"/> 適切に保護されているか？ |
| <input type="checkbox"/> データの責任者は？ | <input type="checkbox"/> このデータを保有することで、コンプライアンス上のリスクは発生するか？ |
| <input type="checkbox"/> どのように使用すべきか？ | <input type="checkbox"/> 適用される規制は？ |
| <input type="checkbox"/> どのように使用されているか？ | <input type="checkbox"/> このデータを必要とする主要プロセスは？ |
| <input type="checkbox"/> これまで、どのように使用されてきたか？ | <input type="checkbox"/> データを変更したら、下流にどのような影響があるか？ |
| <input type="checkbox"/> 作成時と比べて、データは変更されたか？ | <input type="checkbox"/> データを変更する前に誰に通知すべきか？ |
| <input type="checkbox"/> データを変更／更新する方法は？ | <input type="checkbox"/> このデータを保有することで、ビジネスに付加価値はもたらされているか？ |
| <input type="checkbox"/> データの監督者は？ | |
| <input type="checkbox"/> データの品質は？ | |
| <input type="checkbox"/> データの転送方法は？ | |
| <input type="checkbox"/> このデータを扱う業務部門は？ | |
| <input type="checkbox"/> このデータによって、どのような最終目標を達成できるか？ | |

このように、目標はこれまでとほぼ同じです。全社のデータ環境を理解し、その信頼性を確保し、業務との関係を管理することが目標です。変わったのは、その目標を達成する方法です。現在は、さまざまな自動化を利用してガバナンスの負担を軽減できるようになりました。次のセクションでは、その自動化をフルに活用することで、データスチュワード（データ管理／案内人）の作業を最小限に抑え、より価値の高い業務に充てる時間を最大限に増やす方法について説明します。

ガバナンスフレームワークも同じ

データガバナンスを実施するための構成要素も変わっていません。情報の収集方法は変わっても収集する情報自体は同じだからです。

ORG UNIT 8 of 8	PEOPLE 536 of 536	GLOSSARY 416 of 416	ROLE 978 of 978	CHANGE REQUES... 19 of 19
SYSTEM 47 of 47	INTERFACE 49 of 49	DATA SETS 93 of 93	ATTRIBUTES 607 of 607	PHYSICAL FIELDS 196 of 196
PROJECT 34 of 34	DATA QUALITY 290 of 290	PROCESS 82 of 82	COMMITTEE 1 of 1	ACTIVE TASKS 9 of 9
POLICY 135 of 135	REGULATION 132 of 132	REGULATOR 7 of 7	GEOGRAPHY 5 of 5	REGULATORY TH... 2 of 2
BUSINESS AREA 14 of 14	LEGAL ENTITY 10 of 10	CLIENT 3 of 3	PRODUCT 14 of 14	CAPABILITY 64 of 64

図6：ガバナンスフレームワーク

どのような変更が必要か？インテリジェントなデータガバナンスを運用化する方法は？

メタデータのタグ付けの自動化

変更前：手作業

- **誰が？** システムの対象分野の専門家
- **どのように？** データベースをくまなく調べて、列のタイトルとその列に含まれるデータを確認し、どの列にどのようなデータが保存されているかを分類する。
- **なぜ問題だったのか？** このようなデータ分類は、非常に時間がかかり、専門家は本来の業務で忙しいため、後回しとなり、何年もかかっていた。また、単調で反復的な作業であるため、専門家はやりたがらなかった。

変更後：自動化

- **誰が？** 作業の大部分はアルゴリズムによって実行される。必要に応じて、専門家がキュレーションや専門的な入力を行う。
- **どのように？** インテリジェントなガバナンスソリューションにより、名前マッチング、定義済みルール、類似伝播などの手法を用いて、スキャンしたデータを自動的にビジネス定義にタグ付けする。
- **なぜ革新的なのか？** 手作業を必要とすることなく、標準ルールに基づいて大部分のマッチングを完了できる。専門家によるキュレーションでさらにエンリッチ化することで、所要時間を大幅に短縮しながら、より多くの成果を達成できる。

マッチングの仕組み



図7: マッチング

品質管理の自動化

変更前: 手作業

- 誰が? データ品質技術者
- どのように? 測定が必要なデータ品質チェックごとに新しいルールを作成する。
- なぜ問題だったのか? 仮に1,000のデータポイントがある場合、各データポイントについて5つのルールを作成するだけでも5,000のルールを作成することになる。実際にはデータポイントやルールの数はこれよりもはるかに多いため、手作業では管理できない。

変更後: 自動化

- 誰が? 広範囲にわたる測定対象を業務部門が決定する。
- どのように? インテリジェントなデータ品質ソリューションにより、前述のタグ付けされたデータを使用して、特定のデータコンセプトすべてに対して適切な品質チェックを適用する。
- なぜ革新的なのか? データ品質のベースラインを容易に定義できるため、データ品質を把握するための優れた基盤を構築できる。事前の手作業が不要で、関係者は関与することで大きなメリットを得られるため、ガバナンスイニシアチブの成功率が大幅に高まる。

広範囲にわたる主要データ要素の追跡

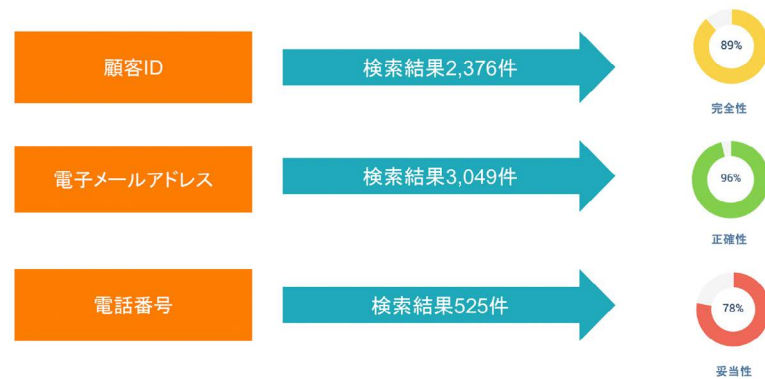


図8: 広範囲にわたる主要データ要素の追跡

変更通知の自動化

変更前: 手作業

- **誰が?** システムスチュワード (いる場合)
- **どのように?** 項目の追加や変更について、下流のユーザーに知らせる。
- **なぜ問題だったのか?** ローカルでドキュメントを変更しても、下流システムで更新されないことがよくある。そのため、ドキュメントを更新した場合は、すべてのリネージダイアグラムについて手作業で更新しなければならない。

変更後: 自動化

- **誰が?** インテリジェントなスキャンニングツール
- **どのように?** データ環境は不変であるとの前提でスキャンを一度だけ実行して終わりにするということはしない。インテリジェントなスキャナーにより、定期的にスキャンを実行し、各スキャンの間に差分がある場合は適切な関係者に通知する。
- **なぜ革新的なのか?** 列の追加や変更に関するガバナンス業務を手作業に頼ることなく開始できるため、リネージのビューを常に最新かつ正確な状態に保つことができる。

ワークフロー起動の自動化

変更前: 手作業

- **誰が?** データスチュワード
- **どのように?** データガバナンス関連の問題をモニタリングし、問題にフラグ付けする。
- **なぜ問題だったのか?** データスチュワードは、文書化されたすべてのアーチファクトを定期的に手作業で見直して、一定の水準に達していることを確認しなければならない。付加価値の低い作業のために多大な労力を不必要に費やすことになる。

変更後: 自動化

- **誰が?** インテリジェントなガバナンスツールにより、要求に応じてワークフローが自動的に起動される。
- **どのように?** ユーザーが見直しの必要/不要な変更を決定して自動化を適用できる。
- **なぜ革新的なのか?** データスチュワードはアーチファクトを広範囲にわたって調べ直したり、定義の変更について関係者と余計なやり取りをしたりする必要がない。適切な検証と制御を維持しながら、関係者のエンゲージメントと貢献を強化できる。

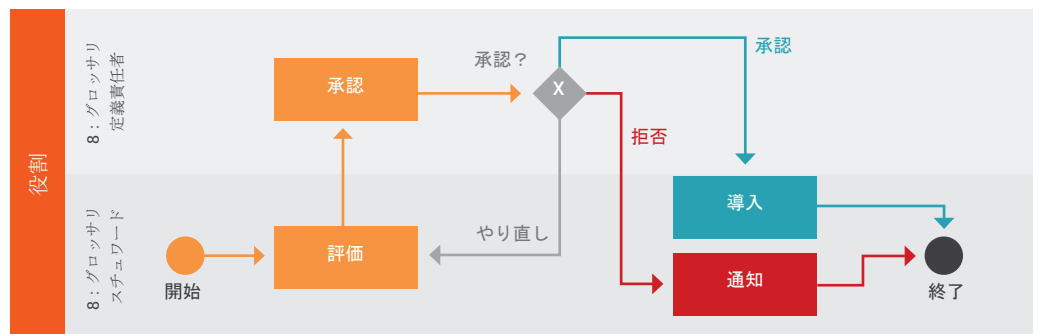


図9: 役割

データプロビジョニングの自動化

変更前: 手作業

- **誰が?** データ技術者
- **どのように?** アドホックなデータアクセス要求が発生するたびに、技術担当者が対象データを収集して要求者に提供する。
- **なぜ問題だったのか?** 近年、データアクセス要求の数が激増しているため、手作業では管理できなくなっている。また、アドホックなデータアクセス要求があふれる中で優れたガバナンスプラクティスを実施するのはほぼ不可能である。

変更後: 自動化

- **誰が?** データ所有者
- **どのように?** 最適なデータ資産をデータ所有者が公開すると、状況に応じてデータが自動的にプロビジョニングされる。
- **なぜ革新的なのか?** データアクセス要求を適切に一元管理および追跡しながら、プロビジョニングの特定の要素を自動化できる。セキュリティ上の理由によってプロビジョニングの自動化が不適切な場合もあるが、一定の条件を満たす場合は、プロビジョニングの管理を円滑化できる。これにより、データサイエンティストはデータの検索よりもデータの活用に使えようになる。

インテリジェントなデータガバナンスの業務上のメリットは?

このホワイトペーパーでは、いかなる企業もインテリジェントなデータガバナンスの必要性を無視することはできない理由を説明してきました。データガバナンスについて、加速する進化を確認し、特定の原則は不変であるものの対象範囲の拡大に伴って実施方法が根本的に変化していることを説明しました。重要なのは、これを圧力や脅威としてではなく、さまざまな業務上のメリットを実現するための好機として捉えることです。

拡張可能で自動化されたデータガバナンスにより、社内の変化に後れることなく対応しながら、業務担当者の業務遂行能力を強化できます。インフォマティカの自動化機能を活用すれば、いつまでも文書化に苦しめられるようなことがなくなり、データリネージの総体的なビューからデータ品質の総体的なビューまで、最新の状態をリアルタイムで表示できます。

一貫性のあるデータガバナンスにより、イノベーションと自動化を長期にわたって継続できます。標準化されたフレームワークがあれば、使用状況に関するデータと設計に一貫性を持たせて、顧客から学び、製品を強化し続けることができます。インフォマティカが提供する俊敏かつ堅牢なデータガバナンスフレームワークでも同様の効果を期待できます。これは、無数のカスタマイズに頼る自動化不能なアプローチでは実現しません。

柔軟なデータガバナンスにより、データ環境、業務環境、技術環境について一元化した共通のビューを構築し、必要に応じて掘り下げることができます。インフォマティカのプラットフォームでできることは、ガバナンスへの対応だけではありません。データを探索し、そのデータを理解し、さまざまなアクション（データ品質の向上、データプライバシーの改善、データのマスター化など）を実行して、常にデータの信頼性を維持できます。

まとめ

インテリジェントなデータガバナンスは、それだけで実現できるものではありません。さまざまな機能を活用し、各機能がどのように連携するのかを正確に理解しておく必要があります。このホワイトペーパーを通じて学んだレベルの自動化と連携を達成するには、単なるポイントソリューションでは不十分です。データガバナンスは、データカタログ、データ品質、データプライバシーなど幅広い分野に及ぶ取り組みです。これらの課題をすべて解決できる単独の製品は存在しません。しかし、経営幹部からマーケティング、製造などを含め、社内すべてのチームをサポートして生産性と効率性を高め、効果的なデータ利用を実現するプラットフォームならあります。



〒105-6226

東京都港区愛宕2-5-1 愛宕グリーンヒルズMORIタワー26階 電話：03-6403-7600（代表）FAX：03-3433-1021

IN09_1120_03993

© Copyright Informatica LLC 2020. Informatica、Informaticaロゴは、米国およびその他の国におけるInformatica LLCの商標または登録商標です。インフォマティカの商標の最新版は、<https://www.informatica.com/jp/trademarks.html>をご覧ください。その他すべての企業名および製品名は、各社が所有する商号または商標です。本文書に記載されている情報は、予告なく変更されることがあり、現状のまま提供され、明示または黙示を問わず一切の保証を伴いません。